
中国地域研究の将来

リチャード・マドソン

〈カリフォルニア大学サンディエゴ校〉

「新・現代中国学」を構築するために、すべての言葉を「中国地域研究」の言い回しの中で問題にすべきだと思う。

中 国

冷戦時代に（少なくともアメリカにおいて）流行した地域研究プログラムでは、「中国」の本質についてイデオロギー上の見解の相違があった。ある者はそれを共産党の脅威、自由世界への戦略的脅威とみた。ある者はそれを革命の過去の遺産を克服しようとして苦悩し、近代化する国家とみた。さらにある者はそれを革命の救世主、世界の抑圧された者に対する希望のかがり火とみた。それらすべてに共通する基本的、致命的な欠陥は、「中国」は一貫した、統合された国民国家であるとの考えであったと、私は主張したい。

統合された国民文化に基づく単一中国の概念は、少なくともアメリカ人にとっては、全世界をその指導下に統合させようと渴望し、自らを同一であると主張する共産主義国家中国と自分たちが競合しているとみた、アメリカ社会の超大国文化がもたらした産物であった。実際、この超大国間の競争はそれが想像したものを創出する傾向があった。しばらくの間、グローバルな敵対関係にあったことが中国の統治者をして彼ら並びに彼らの国家はアメリカの帝国主義のグローバルな渴望を阻止する使命を持った統一勢力を形成していたと信じさせるのに役立ったのかもしれない。

冷戦が終結した今、外部者、そして多分に中国人自身にとっても、中華人民共和国の政府の権威の下にある人民を分裂させている民族的対立、地域的多様性、文化的対立、経済的格差を認めるのは容易である。「中国」という言葉はアイデンティティや政治・経済の多様性を示すことのできる複数名詞でなければならない。例えば、「中国」という概念は中華人民共和国の主権下での領域内における少なくとも次の3つの異なる政治・経済システムの共存をあいまいにするよりも明白にすべきである。新興工業国中国（東アジア NICs のパターンの多くと一致する）の急速に発展する沿岸地域、停滞する東北の「社会主義国中国」（国有企業経済からの移行を行っている東ヨーロッパ諸国の多くと類似している）、第三世界中国の後背地（貧困に陥り、無法に悩まされ、民族的対立によって苦しめられている多くの第三世界の農村社会に類似している）。「中国」という概念は、一方で漢民族の、他方ではチベット、ウイグル民族の多様な民族的アイデンティティについての思考を促進

するように表現されるべきである。

地 域

「地域」研究は人間生活の総合的理解を発展させ、生活の社会、文化、経済、政治の断面を織りなす構造を理解するの必要に基づいている。私の見解では、そのような総合的、学際的理解がこれまで以上に今必要とされている。しかしながら、地域研究は、異なる断面の共存が異なる地理的地域内で統合されたと仮定することによってこの総合的理解を達成しようと試みた。しかしながら、「中国」の国境内で社会、政治、経済、政治生活の多くの異なる形状があり、これら形状のいくつかは政治的国境をはるかに越えるグローバル化した社会制度によって形成されている。

それゆえ地理的「地域」は変革する世界の学際的理解のための特に有益なツールとなるようには思われない。社会行動のある部分を理解するためには、人はそれがああるコンテキスト（文脈）の中でどのように他の社会行動と交錯するかを見極めなければならない。このことは、いかなる文脈の異なる断面も均衡にあるか、共振しているか、あるいはそれらが強く統合されていることを仮定していない。それらがお互いに重要な何らかの影響力を有していることを単に認識しているにすぎない。地理はしばしば枠組みの重要な一部分であるが、文脈は必ずしも地理によって枠組みをはめられる必要はない。文脈は固定されないし、それらのパラメーターはその構成部分が変化するので、常に発展している。

例えば、広東における輸出加工産業の発展を理解しようとするれば、広東の労働をグローバル標準でみて比較的安価にしている社会的要因を理解しなければならないし、中国の後背地での労働余剰を創出している社会的プロセスの合流点、労働者の団体交渉権の機会を奪いながら労働者が沿岸地域に移動するのを可能にしている政治的プロセス、さらには抑圧的労働制度（特にほとんどの労働者が女性である場合の）も理解しなければならないだろう。基礎的な経済学の知識のほかに、この文脈的理解はこの安価な労働の再生産に影響を与えている、さらに将来この労働コストを変化させるかもしれない言語、文化、国内の社会的歴史の知識を必要とするだろう。この文脈的知識は、中国地域研究プログラムでかつて獲得された基本的技術の多くを必要とするだろうが、伝統的な地域研究プログラムでは伝えられなかった知識をも必要とするだろう。例えば、国際政治経済に関する知識、アメリカ、ヨーロッパ、東南アジアにおける中国系企業家のネットワークに関する知識などである。

研 究

我々はどのようにしてこの種の文脈的知識を培養し、伝えることができるであろうか。そのような質問への答えは、ポスト冷戦時代における新しく現出した基本的認識論的、倫理的問題に帰着する。学問上のディシプリンは学者の頭の中に単に埋め込まれているのではなく、広範な権力構造と結びついた制度の中にも埋め込まれている。少なくともアメリ

カにおいては、大学をベースとする学者は我々の資金を提供する政府機関・法人財団が有益とみなす知識を提供することによって資金を得なければならない。例えば昨年私は、「アジア研究プログラム」に助成金を交付する教育省主催のワシントンでの会合に出席した。その会合で教授の幾人かは、地域研究の定義の中に国際労働移動や資本のグローバルな移動を含めた広いものにするよう求めた。これに対して教育省の役人はそのような提案を即座に拒否した。その理由として、地域研究の性質と範囲は国会によって伝統的方法で定義されており、もし資金を欲するのであればこれらの分類に従わなければならないというものであった。一方、党派色の強い「シンクタンク」（例えば American Enterprise Institute, Heritage Foundation）で働く学者は党派の政治的アジェンダを支持する知識を生み出すことが期待されている。権力に真実を話せば、学者は自分を養っている手をかむ職業上の危険を時々冒さなければならない。このことは、学者が自分のキャリアを推し進めようとする野心だけでなく、公共の利益に尽くそうとするより広い使命感によって自分自身が活気付けられるとみたときにのみ持続される倫理上の勇気を必要とする。

公共の利益とは何か。ここで私の立場を適切に説明できないが、富と権力への服従よりも公的議論等を含めて到達された社会正義の共通の理解によって公共の利益（ハバーマスの用語で）を定義したい。これは必然的に人々を隔離し、支配するグローバル制度に対する批判を含むことになる。そのような制度によって使われるツールの一つは、自分自身の主義を普遍的公正とし、それと異なるものを他者として創出した「オリエンタリズム」である。

例えば、アメリカの国家安全保障に関するブッシュ政権の公式声明は、「自由、民主政治、自由企業（新自由主義者の用語での定義）という国家成功のための単一の持続モデルがある」との書き出しで始まり、この考えに反対する国家はアメリカの潜在的敵であると主張している。このことから「文明の衝突」によってグローバルな覇権を維持しようとするアメリカの努力への抵抗を定義することは容易である。9月11日以降、「文明の衝突」における主たるならず者はイスラム社会から出てくるとされる非倫理的近代主義とみなされているが、9月11日以前は中国をアメリカの憎悪の主要な対象と欲する人々がブッシュ政権の外交政策当局者にいたことを忘れてはならない。

そのような悪意のあるオリエンタリズムに反対する方法は権力を振るう者が他者として客観化したいと思う人との議論を深めることである。究極的には、これが倫理的対話であり、世界の本質と世界秩序に関する会話である。自分自身の完全な理解は他者との相互関係の理解を通じてのみもたらされるとのヨーロッパ、アジア文化の伝統の中に強力な人道的伝統がある。私が最近の出版物で述べたように、「徳性の他の文化や制度を理解しようとする試みは、我々自身のアイデンティティを反映するより広いセットの用語を含む『視野の融合』を導くことになる。このアプローチは他の倫理制度への批判を決して不可能にするものではない。しかし、特定の倫理慣行に対する批判が正統性を持つためには、その批判はその慣行が全体の文脈の中で意味するものを幅広く理解した上で行われなければならない

らない。そして他者に対する批判は自己批判を伴うべきである」。そのような対話に従事し、我々学徒も同じ試みをすることによって、中国学者は我々それぞれの社会を、今日の地球の平和を脅かす独善的、熱烈的愛国主義者の倫理から守る上でささやかな役割を果たすことができるであろう。

(原文は英語。邦訳 山本一巳)